おれんじドア
～ご本人のためのもの忘れ総合相談窓口～
の紹介

フォーレスト訪問看護ステーション
千葉　未佳

キーワード：認知症　地域活動　ＱＯＬ

【はじめに】

認知症と診断された方が，何らかの支援を必要とするまでの期間を「空白の期間」と呼び，診断直後のサポート体制やフォローが乏しい現状を差すものである．この期間，当事者は様々な不安を感じていることが多いが，周囲の認知症に対する理解不足や偏見から，失職や人間関係の悪化を経験し，自尊心の低下や孤立を招いてしまうことも多い．当事者やご家族にとって「空白の期間」の解消は切実な願いである．今回は，「空白の期間」の解消を図ることに焦点を当てた取り組みであるおれんじドアについて紹介する．

【丹野智文氏の紹介とおれんじドア開催までの経緯】

丹野智文氏（以下丹野氏）は，39 歳の時に若年性アルツハイマー型認知症と診断された．当初は認知症=終わりといった思い，仕事やご家族のこと等将来に向けた不安と共に辛い時期を過ごしていたそうである．そんな中，将来的に妻の助けになればと認知症の人と家族の会に入会したことが，彼の世界を広げるきっかけとなる．多くの当事者との出会いや翼の会での活動から，丹野氏は認知症と共に生きることに希望を見出し，現在は仕事を続けながら講演活動や当事者が発足したワーキンググループも含め，当事者支援を目的とした活動を精力的に行っている．その中で，おれんじドアは丹野氏が発起人となり平成 27 年 3 月に実行委員会を発足，宮城の認知症ケアを考える会世話人有志と，趣旨に賛同する者が参加している．おれんじドアは平成 27 年 5 月より開催，平成 27 年 9 月現在 23 名の実行委員で運営している．

【おれんじドアの概要】

①趣旨：丹野氏は，「認知症の診断を受けて，これから先どうなるだろうと不安でならなかったとき，私を前向きにさせてくれたのは，私より先に診断を受け，その不安を乗り越えてきた認知症当事者の方々との出会いでした．このおれんじドアには，もの忘れなどで不安を抱える方や認知症と診断されたご本人に，ぜひ足を運んで頂きたいと思います．」と述べている．認知症と診断後，最初の総合相談窓口としての機能を持ち，まずは気軽に来てもらうこと，初めて来た人の不安を癒すことが趣旨である．なお，認知症と診断された当事者が，同じ当事者の相談窓口となるのは全国的に初めての取り組みであり，将来的にはこのような会を各地に広げていきたいという展望がある．

②日時・場所：毎月第 4 土曜日，14 時～16 時　東北福祉大学ステーションキャンパス 3 階「ステーションカフェ」

③内容：相談会を定期的に開催して相談者を招く．当事者・ご家族 2 グループに分かれ，相談者の話の内容により，ニーズに応じた担当者が個別相談や地域で使える社会資源について情報提供をおこなう．

④参加状況：当事者・ご家族は県内遠方からの参加もある．参加者は確定診断を受けていない，或いは診断後間もない方，介護保険サービスを受けていない方が半数程である．その他，県外を含む地域包括支援センターの職員や当事者を含めた家族の会会員，地域のケアマネジャーなどの参加や協力がある．

⑤参加者の反応と今後：参加者からは気持ちを共有できて良かった，これからの生きる道筋が何となくみえてきた，居住地域の情報がもらえた等様々な声をいただいている．当事者が当事者の相談に応じることで，気持ちを共有できる仲間が居ることを知り，前を向くきっかけを得ることがおれんじドアの一番の意義と捉えている．「空白の期間」の不安を軽減することで，これまで通り当たり前の生活を過ごせる当事者やご家族が増えていくことを目指し継続していきたい．

【おわりに】

丹野氏が，「周りの人が支援者やサポーターではなく，すべての人をパートナーだと思うと，助けてもらいながらも，何か私もその人のためにできないかと常に考えるようになります…」と語った時に「認知症の人に優しい社会＝人に優しい社会だ」と認知症の人と家族の会高見代表が述べた言葉を思い出した．恐らく他敬自尊の概念とも通じるだろう．最後に，発表に当たり多大な協力を下さった丹野氏をはじめ，おれんじドア実行委員会の皆様に心より感謝申し上げます．